

品川徹君を偲ぶ

小幡道昭（昭44）

去る7月22日、1968年度卒、品川徹君が他界した。享年49歳、慢性腸炎による病死であった。品川君は在学中新聞部で活躍し、卒業後直ちに都立大学に進み、西洋史、政治学を専攻、学究の道を歩み放送大学講師などを務めた。フランス社会主義運動やブルム政権に関する論文が研究業績として残っている。

品川君とは1年F組ではじめて出合い、社会に對するその鋭い観察眼に驚嘆した。刷り上がったばかりの新聞を級友一人ひとりに颯爽と手渡し去ってゆく、背筋の伸びた瘦身が鮮やかだった。在学中、ベトナム反戦運動について論じあったり、ときにエスケープしてゴダールの映画を見にいたりするうちに、次第に親しい友人となった。卒業後も親交は続き、大学周辺の喫茶店や入院中の病室などで30年以上も絶えることなく議論を重ねてきたことになる。

品川君をみると、理知的に生きるとはどういうことか、よくわかる。多感な人であっ

たが、それを明確な言語の世界に転ずる真の知性に恵まれていた。幼いときからの膨大な読書量がそれを培ってきたのかもしれない。高校時代じば耳にした「知識人」という言葉がまだ生きているなら、まさに第一級のそれに値しよう。

品川君は大学在籍中から闘病生活を余儀なくされた。この難題が課せられておらねば、その研究は何倍も進んだことであろう。悔しくもあつたろうが、品川君の口から愚痴めいたことをきいた覚えは一度もない。潔いというべきか。

今年の梅雨明けは、毎夕きまって激しい雷雨に見舞われ、なにか不安な気分がつる日が三日続いた。その後の晩、雷鳴の遠のくなか、東京板橋の帝京病院で父君に看取られ眠るように息をひきとつたとき、霊安室で対面した品川君は穏やかな表情をしていた。冥福を祈る。

おくやみを申し上げます

99年5月1日～99年11月15日までに判明した方